

三条北ロータリークラブ週報

2013-2014年度

国際ロータリー会長：ロン D. バートン「ロータリーを实践し みんなに豊かな人生を」

第2560地区ガバナー：山崎堅輔 「進めよう！職業奉仕の洗練化を！」

「備えよう！大震災の心構えを！」

三条北ロータリークラブテーマ「楽しくなければ ロータリーではない」

会長：丸山 勝

幹事：岡田 健

SAA：石黒 隆夫

例会日：火曜日12:30～13:30

例会場：三条ロイヤルホテル TEL34-8111

事務局：三条市本町3-5-25三条ロイヤルホテル内

TEL:0256-35-7160 FAX:0256-35-7488



HP : <http://www.sanjo-nrc.org>

AD : north@sanjo-nrc.org

本日の行事：三条市内4RC合同例会

記念講演「障害や病気を乗り越えて

～人との関わりの中で～

- ◆本日の出席：68名中33名
(内記帳5名)
- ◆先々週の出席率：68名中54名 73.53%
(前年同期 80.0%)
- ◆2月の出席状況：会員数68名
例会数3回・平均出席率 79.9%
(前年同月 77.86%)
- ◆本日のゲスト：
NPO 法人ジャパンハンドイクアップゴルフ協会理事
公益財団法人日本プロゴルフ協会
ティーチングプロB級 小山田 雅人様

- ◆先週のメイクアップ：(敬称略)
- 3月 6日燕 RC 石川勝行
- 8日ローターアクト地区大会 岡田 健
- 10日三条南 RC 石川勝行、
落合益夫、山崎 勲
- 11日次年度役員理事委員長会議
岡田 健、外山裕一、外山晴一
今井克義、石川勝行、金子太一郎
丸山 勝、斎藤 正、木宮 隆
佐藤弘志、星野義男、石丸 進
平出富士夫、坂内康男、瀧岡 茂
大橋政雄、渋谷義徳、本間建雄美
高橋研一、吉田文彦、浅野潤一郎
山中 正

会長挨拶：小出和代三条東 RC 会長



皆さんこんにちは！本日は、市内4ロータリークラブ合同例会にご出席くださりましてありがとうございます。

今年度は、東ロータリークラブが担当ということで、いろいろ検討させていただきましたが、会員の多くの方がゴルフに興味をお持ちかと思ひ、プロゴルファーをお呼びし、講演をしていただくことにしました。

講師については、後ほどご紹介いたしますが、障害や病気を乗り越えて、努力されてプロの資格を取得してきた人のお話ですので、これからの私たちの生き方や商売繁盛に繋がるヒントを頂けるのではないかと考えております。また、講演の中で、ゴルフのスコアをアップさせるテクニックなどもお聞かせいただけるということですので、楽しみにしております。小山田様よろしくお願ひいたします。

また、昨年9月に実施いたしました第4分区のIMの際には、中條パストガバナーはじめ、各クラブの方々よりご協力をいただき、無事終了させることができました。この場をお借りして御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

2年後には、10周年も控えておりますので、今後ともご指導下さいますよう、よろしくお願ひいたします。



講師紹介三条東 RC 大方 一 幹事



小山田雅人（こやまだ まさと）様 栃木県生まれです。

講師は、2歳の時に、実家が営む精肉店の機械に巻き込まれ、右手首より先を失う、大怪我に遭いました。

しかし、幼い頃より、少年は、スポーツが好きで、『野球、サッカー、陸上』と、何にでも挑戦！

中学校では、野球部のピッチャーとして、県大会準優勝！

そして、中学3年生の頃、初めてゴルフと出会い、社会人になってからは、特に力を入れ、一般アマチュア選手権大会に参戦。

2009年には、栃木県アマチュア選手権2位！

2011年栃木県、県知事杯4位！

日本障害者ゴルフ大会では、常に優勝！

そして日本代表として、世界大会に何度も出場し、優勝！

数々の素晴らしい、好成績を残されています。

そして、日本プロゴルフ協会、ティーチングプロ、合格！

『一般の方でも出来ないくらい。』『これは素晴らしい、事だと思います。』

今日では、ティーチングプロとしても、大活躍しております。

本日は、『キャッチボールしたり・・・』実践を交えながらの講演とお聞きしております。

1時間の限られたお時間ですが、どうぞ、楽しんでいただければと思います。

以上、簡単ではございますが、講師紹介をさせて頂きました。

「障害や病気を乗り越えて ～人との関わりの中で～」 小山田雅人様



みなさん、こんにちは。富士産業所属・プロゴルファーの小山田といいます。よろしくお願いします。

今、プロゴルファーと言いましたが、正式なプロと登録されたのは今年の1月1日からです。では、その前までは何を

していたかという、公務員として栃木県庁で25年間働いていました。その25年間務めた栃木県庁を退職し、障害者でもプロゴルファーになれることを証明しよう、現在所属している富士産業にバックアップをしていただき、プロテストに挑戦し合格することが出来、正式にプロゴルファーとなることが出来ました。

今のテストになってから初めての肢体不自由者のプロゴルファーとなりました。目指したことが一つ実現しました。

今後の目標は、今年9月に初めて障害者ゴルフ世界大会が日本で行われます。この大会で優勝し、障害者ゴルフで世界一になりたいと思いますし、パラリンピックでも正式競技になるかもしれないゴルフの部門での金メダルを目指し

ています。

「障害や病気を乗り越えて」～人との関わりの中で～とありますが、私が、2歳のときに障害を負い、23歳のときに一つ目の病気が発症し、38歳の時に二つ目の病気が発見され、そして、46歳の時に三つ目の病気が発症し、現在に至っています。

それでは、これから私が、障害や病気にあっってから現在まで、「どのように生きてきたのか」また、乗り越えるためには「何が必要だったのか」「どんな人達と関わってきたのか」、ということをお話していきたいと思っております。

まず、右手を失ったことですが、2歳の時に実家が営業している精肉業の（というより、肉屋と呼んだ方が分かりやすいと思いますが）肉を切る機械に、間違っって右手を入れてしまい、手首から先を失うという事故に遭いました。（余談ですが事故後、事故にあった機械は交換しましたけれども・・・）

2歳という年齢でしたから、実際に物心ついた時には、生まれた時から“右手が無い”という感覚でした。ですから、両親には、右手を失った原因について、大きくなるまで聞いたこともありませんでしたし、両親を責めたりしたこともありませんでした。

では、“何故”右手を失ったことを知ったか、というと、小学校の時から“テレビや新聞”の取材を受けるようになり、その取材が原因で、右手を失った事を知ることが出来ました。

私の取材という訳ですから、自分は勿論のことでしたが、両親も取材を受けました。その取材の中で、右手を失った原因について、話していたことを、取材の場ではなく、後で、テレビの放映を見て知っていった、という感じでした。

そのテレビの中で両親は、自分の子どもに障害を負わせてしまったことを、とても後悔している、ということを知りました。[特に母親は、普通では2歳の子供が乗ることが出来ない場所に肉を切る機械が置いてありましたが、仕事が忙しかったため、機械の前に私を置いてしまい、右手を失ったのは、自分の責任だ、と話していて、とても悲しく思えました]ですから、そんなに後悔している両親を、これ以上追いつめたくないですし、後悔していることを全く態度に出さないで、右手の無い私を、普通の子と同じように育ててくれた両親を、《今と変えたくなく》、という心境から、両親には、この右手のことを、何も聞かないようにしましょう、と心に決めました。

今、小学校の時から、テレビや新聞の取材、と言いましたが、それは、何が原因で取材を受けるようになったか・・・と言うと、手の無い私が、野球を始めたからなのです。

小学校3年生から野球をやるようになりました。いろいろなスポーツと出会ってきましたが、野球との出会いが、私を大きく変えたと思います。小学校3年生から、父親と家でキャッチボールを始めました。勿論、私は右手が無い訳ですから、左手でグローブを使い、ボールを捕って、ボールを捕ったグローブを地面に置いて、ボールを拾い投げ返す。そんなキャッチボールを父親と始めました。

始めた頃は、そんなキャッチボールで良かったのですが、だんだん慣れてくると、ボールを捕るたびに、いちいちグローブを地面に置くのが嫌になってきました。

[どうにかして、グローブからボールを早く取る方法はないか]、と、考えるようになりました。「考える」ということは本来、父親とキャッチボールをしている訳ですから、父親に相談して、いろいろな事を一緒に考えながら、より良い方法を探していくもの、だと思えますし、父親からすれば、私から相談された事に対して、私の教育も兼ねて、私を指導していくもの、だと思えます。

それに、当時、私の父親は、栃木県那須町の野球指導、という肩書きまで持っていた人なのです。ですから、私からすれば、私の相談を受けるまでもなく、野球の指導をしてくれるもの、とっていました。

(余談ですが、私の父親はプロ野球のスカウトからプロに誘われたこともある程の野球の名手でした・・・)ですが、私の父親は、毎日のようにキャッチボールはしてくれるのに、一切の指導はしてくれませんでした。

「どうして教えてくれないのだろう」子どもですから、悩みました。いろいろ悩んだあげく、子どもながらに、こんな答えを考え出しました。

《父親は、野球の指導員として障害のない人(いわゆる健常者)には、良い指導が出来るのですが、私のように右手が無い人、と野球をすることがなかったため、父親が教えるより、自分自身で考えることが、一番の効率の良さ、と考えて、私に何かを考えさせようと、毎日、キャッチボールをしてきているんだと思いました。》

そう考えてからというもの、父親とキャッチボールを始める前まで、家の近くの壁に向かって、一人でボールをぶつけて、跳ね返ってきたボールを捕ってから投げる練習をするようになりました。いかに早く捕って、いかに早く投げられるか、という練習を毎日行いました。



キャッチボールが出来るようになったので、小学校4年生の時に、野球部に入部しました。

野球部に入部すると、小学校では4番バッターで、那須郡大会に優勝し、中学校では、ピッチャーとして栃木県大会を準優勝しました。

こういう実績を聞くと、野球を始めたときから、上手かったように聞こえますが、小学校の野球部入部当時から、上手だった訳ではないのです。むしろ、右手がない補欠選手として、野球部に在籍していました。

実際に、小学校時代は野球部の選手としても扱ってもらえず、玉拾いばかりさせられていました。そんな時なのです。今まで何も言わず黙っていた父親が、今度は指導者として私を指導し始めたのです。

先ほどもでは、障害者に指導するケースがない、と言いましたが、それは、キャッチボールだけ

であって、“走ったり、守ったり、打ったり”することは、私の場合は普通の人と同じだと、言うのです。……人と同じ条件を補欠なのだから、人より練習しなさい、と言われました。

それからというもの、毎晩のように、練習とは名ばかりの、特訓の毎日でした。

ここに居るみなさんは、テレビのアニメで見たことがないかもしれませんが、昔、「巨人の星」という野球アニメが放送されていました。父親は、そのアニメに登場する主人公の父親である“星一徹”さながらの特訓を、私にやらせました。今は、もうやってはいけなくなりましたが、〔うさぎとび〕や、腕立て伏せ、腹筋、新聞紙を丸めて家の中でトスバッティング、そんな特訓を、毎晩やりました。それと、今、腕立て伏せと言いましたが、そんな効果というか違いが、右手と左手に現われています。

これだけ左腕を鍛えたために、左腕だけで腕立て伏せが出来るようになっていきます。

それに、野球をするために左腕だけを鍛えたのではなく、ピッチャーであったために沢山の走り込みをしました。

勿論、学校での練習時間だけでなく、家に帰ってから一人でも走っていました。

そのことがあったために、普通の人と同じか、もしくはそれ以上にゴルフクラブが振れるようになりました。

スポーツで野球を選択したおかげで、右手がなくても、それに代わる体の部分を応用する方法と応用するために今ある部分を強化することを学びました。

それと、今、義手を外して普通に右腕を見せしていますが、実は、今まで家族以外の前では、“絶対”義手を外しませんでしたし、右腕も見せませんでした。

なぜ、外さなかったか、というと……、私が、小さい頃に、「義手を付けていない私を見た人達が、同情するような目で、私を見ていたからなのです。」今では、意識しなくなりましたが、義手を付けて活躍しているうちは、あまり相手も意識しませんでした。右腕を見せた瞬間から、相手の意識が、今までと変わるからでした。

私のことを、障害者と意識してはいないのですが、「義手を外した瞬間」、「右腕を見せた瞬間」から、健常者と障害者、という変な図式が現われてしまいました。それを避けるために、義手を外すのを止めていたのです。

その義手を外すきっかけを作ってくれたのが、ゴルフとの出会いなのです。

ゴルフを本格的に始めるようになったのは、高

校卒業と同時でした。

ゴルフを始めた頃は、一人で練習場に行き、かなりのボールを打ちましたが、なかなか、思い通りのボールを打つことが出来ませんでした。今のスイングになるまで、相当な時間がかかりましたし、時には、朝 10 時から夜 10 時まで、練習場で練習している、なんてこともありました。

先ほどから、練習や特訓の話をしてはいますが、私は、特訓が“大好き”なんです。

それと、これはあるプロゴルファーとの会話でのことなのですが、プロゴルファーが私のスイングを見て自分の体にあった理想的なスイングだと言ってきました。

基本を知っているながら、自分の体にあった動きに修正しているため、今の飛距離とスコアがあるんだと言ってもらえました。

この会話は、かなりの自信につながりましたし、人のスイングや動作を気にせず、自分で思い描いたことを、貫き通している結果だと思っています。

そもそも、ゴルフというスポーツは、個人スポーツです。

それに、戦う相手は、基本的には人間ではなく、コース（自然）です。

同じ場所に障害者が居ても、気にする人は居ないんです。

ただ、障害者がゴルフをする、ということは、健常者に比べて条件が厳しくなります。

ルールについても厳しくて、義手についても条件があります。動く義手やクラブに固定する義手を付けてはいけない、ということです。

アメリカで行われていた障害者ゴルフ大会に、日本代表として 4 年出場し、手の障害部門を連続で優勝しましたが、私以外の手に障害をもっている方たちは、動く義手や固定する義手を開発して、いろいろな義手を付けて参加していました。ですが、ほかの選手達が付けている義手を付けてしまうと、通常の大会というか、健常者の大会に出ることが出来ないのです。

私の場合は、義手が動くことも出来ないし、固定することも出来ない、ということで、通常の大会の参加を認められました。

そんな私を、ゴルフの仲間の人達は、障害者とはまったく見てはいません。

というのも、普通なら、健常者が障害者の助けとなって、いろいろな物事を処理していくもの、だと思いますが、ことゴルフに関しては、立場が逆転しています。

現在は、いろいろな方のゴルフ指導にもあたっています。

その指導をしている、ほとんどの人が、健常者【普通の人】です。

ゴルフを教えている時に、私は、右手が無いにも関わらず、相手の右手の動きを、「こうしなさい」とか、「こう動かしなさい」と、左手で教えています。相手にしてみれば、右手が無い人が、「右手の動きまで分かるのかなー」って思っている、実際に、私の教え通りにボールを打ってみて、きちんとボールが打てるようになれば、「この人は、手が有るとか、無いとかは、関係ないし、障害なんて感じられない」って言ってくれるようになります。



この瞬間が、自分にとっては、とても嬉しいし、“ゴルフって居心地がいい場所だなー”って思えるようになりました。そんなことが、繰り返されるうちに、人前で右腕を見せても大丈夫、と思うようになり、義手を外し始めたのです。ですが、そんな大切なゴルフとの出会いの中で、3つの病気が発見されました。

今でも、その3つの病気は治っていないため、治療を続けています。

23歳の時の病気は、脊椎分離症という病気です。あまり聞いたことがないと思いますが、ヘルニアと同じように、腰に痛みが出る症状を引き起こします。私の場合は、症状がひどくて、一人で立ち上がることも、出来なくなりました。

人に助けってもらって、やっと立ち上がったとしても、普通に歩くことも出来ないで、何かに掴まらないと歩けない、という状態でした。

病院も幾つも探して、やっと今、通っている病院を探しあてました。

何度か治療し、一人で普通の生活が出来るようになるまで回復したときに、先生からこんなことを言われたのです、「また同じ症状になるからゴルフは諦めなさい」と。その時はショックでした。

しかし、私の良いところなのでしょうか？先生の言うことを素直に聞かないんです。先生に言われたからといって、素直には“あきらめない”のです。いろいろなゴルフ雑誌を読みあさり、腰に負担の掛からない、ゴルフのやり方はないのか、と一生懸命調べました。

調べた結果、何とか腰の負担を減らすやり方を

見つけ、先生に相談し、ゴルフを続けることの、了解を得ることが出来ました。

勿論、痛くなったらすぐに病院に来なさい、ということなのですが・・・。

それから先生は、「やめなさい、諦めなさい」とは言わなくなりました。

それから、もう一つの病気なのですが、今から8年前に病気が発見されました。

その病気の名は、“脳腫瘍”です。《それも悪性のガンでした。》(グリオーマ)

発見後すぐに、手術を受けました。

頭を開いて、[脳] そのものを取る、という手術です。私の場合は、脳の中にできる腫瘍でしたので、腫瘍だけを取り除くことが出来ないため、正常な部分も含めて脳を取りました。

勿論、手術は成功したのですが、ただ、“ガン”がある場所が場所だったため、これ以上は取ることは出来ない、と言われ、ガンを一部脳に残したまま手術は終了しました。

(腫瘍のある場所は、左脳と呼ばれる場所で、働きとしては、考えたり、言葉を話すために使う場所です。ですから、除去しすぎると思考能力が無くなり、今、こうして話をしていることも出来なくなってしまうのです。)

そのため、私の頭の中には、今もガンが残っている状態です。

勿論、ガンが残ったままですから、定期的に病院に通って進行状況をチェックしてもらっています。それに、いかに、悪性のガンとはいえ、担当の先生の出来る限りの力で、ガンを取り除いてもらいましたし、それに私のガンに効く抗がん剤もあります。“ある”と言っても、ここからが、ほかの人と違うところだと、思うのですが、勿論、担当の先生と何度も話し合っていて決めていることですが、抗がん剤をまだ服用したり、投与したりしていない、ということなんです。

ガンを持っている人間が、なぜクスリを服用しないのか。皆さん、疑問に思うでしょう？それは、クスリの副作用が、大変強いからです。

副作用によってゴルフが出来なくなる、ということでした。

先生も私も悩みました、ゴルフによって、いろいろな苦難や挫折を克服し、乗り越えてきたのに、世界と戦うためには、今のゴルフが重要なのに・・・。そんな大切なゴルフを、私から無くしてしまっても大丈夫なのか？

出した答えが、こうでした。

ガンの進行状況を常にチェックして、クスリを服用しなければいけない時期まで服用をやめよう、ということでした。

出来る限り、今の状態でゴルフを続けよう、

今の状態で世界を相手に戦えるだけ戦おう、ということなのです。

そんな状態が8年を過ぎて、現在でも、クスリの服用もしていないのに、手術後の状態が一切変わっていません。悪性の腫瘍が頭の中に残されているのに全く変化しないのです。

このことは、担当の先生も首をかしげています・・・というのも、私のガンの術後10年の生存率は46%だからです。

3月7日に検査した時も、先生から「小山田さんの体の中には抗体があるのかな？」と言われましたが、私は人間の中には、クスリに頼らなくても、ガンに対抗する何かがあるのだらうと思っています。ただ、そうは思っても生存率のデーターは気になります。それに、ガンと宣告されてから結婚し、娘も授かりました。

もし、データーどおりになったとしても、娘の記憶に強く残したいという思いで、片手のプロゴルファーを目指すことに決めました。

それともう一つの病気です。

最初に1月1日からプロゴルファーになったと言いましたが、プロゴルファーとして初めてゴルフをした1月3日の夕方にその病気が発症しました。その病名は「急性心筋梗塞」です。

毎年正月3日に行われている友人たちとの新年ゴルフコンペの日でした。

友人たちは私がプロゴルファーになったことを分かっていますので、みんなから「おめでとう」と声をかけられ、楽しく有意義なゴルフでした。そのゴルフの懇親会の席でのことです。みんなと楽しく会話している時に急激に胸が痛くなり、吐き気と冷や汗が止まらなくなりました。

友人の中には医者もいましたので救急車を呼び病院に緊急搬送されました。

病院に着くと緊急手術となり、一命を取り留めましたが、翌日、妻から1時間病院に来るのが遅かったら命がなかったと先生から言われたと聞いて本当にビックリしました。

勿論、命は助かり良かったと思っていますが、通常の急性心筋梗塞患者より重症ということで、ゴルフに復帰出来るのは6ヶ月後と言われ、プロとなったのにゴルフが出来ないことにショックを受けました。

しかし、ショックを受けたのは最初だけで、寝たきりの生活が一週間で終わり、リハビリを開始してからは、ゴルフが出来ないのであればリハビリ内容を徐々に強化して体力トレーニングをしようと考えました。

プロにはなりませんが、自分のゴルフに足りないものも分かっています。今回の病気は、そういった部分の強化を初心に戻って“もう一度鍛

えなさい”というメッセージだったのだろうと今は考えています。

それに、緊急搬送された病院は関係機関に室内トレーニングセンターがあります。退院と同時にその室内トレーニングセンターでトレーナーに自分が鍛えたい筋肉の説明をして、トレーニングメニューを作ってもらい、リハビリという名のトレーニングをしています。

その成果なのか、病院での検査の結果、ゴルフの許可がおりました。早速、3月10日にゴルフをしてきましたが、入院前よりボールが飛ぶようになり、嬉しいゴルフとなりました。

ここまで話した、障害や病気に関する事、思い出に残ること、その話の全ての事に関して、統一した事があります。それは、全ての事について、誰かが、私に関わっている、ということです。

富士産業の社長・両親・学校の先生・病院の医者・友人や仲間・そして私の「妻」です。

私が、誰かと関わることによって、自分一人では、～乗り越えられない～ことでも、誰かに相談することによって、自分が越えられない壁を、越えるための工夫や、越えるために必要な新しい考えを思い描ける、ということなんです。

自分一人では、“あきらめなきゃいけないこと”は沢山あります。でも、自分が何かにつづかっても、誰かと、関わることによって、解決方法が必ず見つけ出せるはずなんです。

時には、相手にその意志がなくても、相手の言葉や行動によっては、自分に新しい道が開ける場合もあります。

(私の場合は、腰を痛めたときに、病院の先生が私の体を気遣って「ゴルフをあきらめなさい」と言いましたが、“あきらめたくない”という一心から、自分なりのゴルフのやり方を見つけました。そのため、今のゴルフが出来上がり、世界を目指して戦えるようになったんだ、と思っています。)

“あきらめない”という気持ちを“決して忘れず”、そして、決して自分一人で、何とかしようとは思わないことです。心配なことや不安なことがあったら、誰にでも、相談や自分で考えていることを話していただくことです。

そういう気持ちを常に、《忘れないで欲しい》と思います。

それから、皆さんに、これも分かって頂きたいと思います。

障害者や病気の人に対して、普通なら、助けが必要です。でも、どんな時でも、“声を掛ければいい”という訳ではないのです。

障害や病気を考え、相手のことを理解して、

温かい目で見守っていて、障害や病気を持っている人が、“本当に困っている時”にだけ、助けをあげよう、という気持ちでいて欲しいのです。

どんな時でも助けていたら、その人は、戦うことや努力することを忘れてしまいます。人に頼りっきりの人生、になってしまいます。全ての障害や病気を理解することは、とても難しいと思いますが、ぜひ、忘れないで、障害者や病気を持った方と向かい合っていたいただきたいと思います。

それから、知り合いから言われたことで、私の心に強く残る言葉があります。

「ないものを嘆くより、あるものに感謝したい」という言葉です。私は手首より先を失いましたが、手首から肘までの腕の部分は残りました。その残された腕を工夫して使うことによって、いろんな事を克服出来たと思っていますし、脳についても同じです。脳腫瘍によって左脳の大部分はなくなってしまいましたが、少しの左脳と右脳が残されています。残された左脳と右脳を使い手術前に近づこうと思っています。

それと、これは余談なのですが、先ほど関わ

っている人達の中で“妻”と言いましたが、私は、妻に陰から支えられています。

ガンを宣告される、ちょっと前に私が事務職員として赴任していた那須特別支援学校で知り合ったのですが、結婚前だったこともあり、実家に帰るよう妻に話しました。

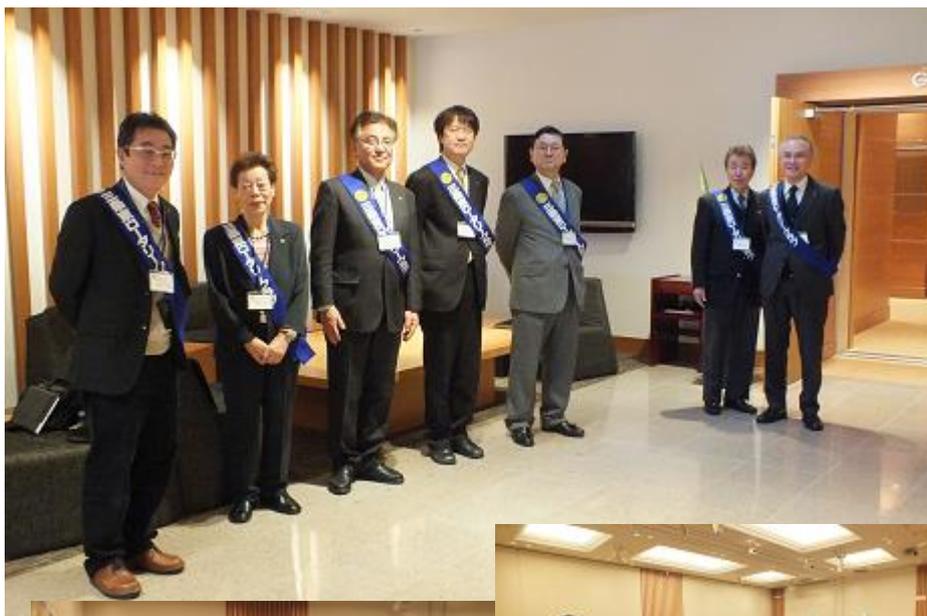
その話を聞いて妻は、私を叱りました。

「私があなたを支えるから、出来る限りのことをやりなさい」と言われました。

今では、妻は、私よりも“脳腫瘍”に詳しくなっています。今は、私のために、いろいろな努力をしてくれています。

最後になりますが、皆さんも“病気やケガ”または、“精神的な、心のストレス”で、[私ばかり]とか、[何で私が]、何て、深く悩まないで下さい。自分以外にも、特に、私のように《障害や病気に遭いながらも、それと戦いながら、人生を楽しく、目標に向けて生きている人間がいるんだ》ということをお忘れしないでいただきたいと思います。

これで私の講演を終わりにしたいと思います。聞いていただいて、ありがとうございました。



東RCの皆さんに迎えられて

順次食事後に例会場へ



「ありがとうございました」

平成26年3月8日(土) 13:00 開会点鐘 於: ジオワールドVIP

ホストクラブ: 三条ローターアクトクラブ

開会宣言と点鐘その他があり、三条市長の國定さんの挨拶がありました。若いアクトの皆様を期待していますという内容です。

次には2560地区の佐々木ガバナーエレクトの挨拶でした。

山崎ガバナーが所用で来られなくてピンチヒッターでした。

会員減少で苦勞されて大変ですが、良く頑張って居られる、今年度は少し増加に転じている様です。

2560地区では昨年末83名が現在90名とのことで、エレクトよりお褒めの言葉があり、アクトの方々は必ずロータリークラブへ入会して下さい。の言葉で終わりました。

青少年委員長の小山さん、地区ローターアクト委員長の原さんは代理が挨拶され、地区代表の如澤さんの挨拶は若人らしく元気がみなぎっており、聞いていても気持ち良かったです。

その後、感謝状や記念品の贈呈が有り閉会しました。

各クラブの活動報告がありました。が全般的に人員が少ない為に活動が制限されている感が否めないと思いました。

ちなみに白根クラブ5名、三条クラブ14名、長岡東10名、新発田16名、新潟15名、新潟南8名、高田14名、新井8名となっております。

ローターアクトクラブ(RAC)とは、18~30歳(厳密には、30歳になった後の6月30日まで)の若年成人を対象に、奉仕を志向する市民と指導者を育成するため、ロータリークラブ(RC)が提唱する世界的な団体です。地域社会を基盤とするRACと、大学を基盤とするRACの2種類のRACがあり、1クラブは、少なくとも15人の創立会員でスタートすることが望まれています。「ローターアクト(RA)」の名称は、「ロータリー」(Rotary)と「行動」(Action)からきています。

1960年代に入って、世界中の青少年が、共に活動できるような組織をつくろう、という機運が高まりました。1962年、国際ロータリー(RI)理事会により、まずインターアクトプログラムが宣言され、インターアクトクラブ(Interact Club、IAC)が次々と世界各地に創立していきます。しかし、インターアクトは14~18歳の高校生の年代が対象で、卒業と同時に会員資格が失効。これを継続するものとして、1968年1月に、当時のルーサー H.ホッジスRI会長により、「ローターアクト構想」が打ち出されたのでした。

日本最初のRACは、ノースシャーロットRACと同じ1968年に創立した埼玉県国際商科大学RAC(現川越RAC)です。当時の第357地区(埼玉県・千葉県 現在は第2570地区・埼玉県)の川越RCの提唱で、6月1日に発足。創立会員12人、例会日は、毎週金曜日でスタートしました。

2009年9月末現在、日本のローターアクトクラブの数は280、会員数は約6,400人です。

ローターアクトの目的

若い男女が、個々の能力の開発に当たって役立つ知識や技能を高め、それぞれの地域社会における物質的あるいは社会的なニーズと取り組み、「親睦と奉仕活動を通じて」全世界の人々の間に、よりよい信頼関係を推進するための機会を、提供することにあるとされています。

この「親睦と奉仕活動を通じて」は、ローターアクトの標語であり「奉仕を通じての親睦(Fellowship Through Service)」として採択されていますし、RAのプログラムは、この標語を中心として展開されます。

◆本日(3/11)の記帳受付

三条RC 斎藤弘文、石橋育男、中林順一、小越憲泰、菊池 渉、阿部吉弘、衛藤泰男
加藤紋次郎、山田富義

三条南RC 鈴木 武、西潟精一、吉井正孝、長谷美津明、星野健司、渡辺俊明、田代徳太郎

三条東RC 栗山正男、佐藤公信